

新機軸の大学祭

10月29日から3日間開催

実行委
テーマ

「でっかい転機、ここらで奮起」

第四十二回大学祭に寄せて

学生委員会
副委員長

◆ 上田 良文

四十二回目の広島大学
大学祭が今年度は、十月
二十九日(金)から三十一日
(日)までの三日間、西条
キャンパスで開催される。
主催者である大学祭実
行委員会の設定したテー
マは、『でっかい転機、
ここらで奮起』である。

このテーマの主旨につい
ては別の機会に主催者自
身による解説があるはず
であるが、学生諸君の、
決意と意気込みがうかが
える頼もしいテーマであ
ると感じるのは、筆者の
みではあるまい。

今年度の大学祭には、
従来の学生サークル中心
の参加だけではなく、各
学部からの参加や東広島
市の文化諸団体の参加も
予定されている。従って
広島大学の研究教育内容
を反映したアカデミック
な企画や、地域文化の香
りがただよう企画も加わ
ること、より多くの人
に楽しんで頂ける大学祭
になりそうである。
今さら指摘するまでも

なく大学祭は、大学の全構成員の祭典
である。大学祭の参加形式がいかに全
構成員に対してオープンになっている
としても、その実質が伴っていないけ
れば、その内容も、それだけ貧弱化せ
ざるを得まい。さらに大学祭が大学人
の祭典であるからといって、学外に対
して閉鎖的であっていいわけではない
であろう。

知的創造活動に従事するものの基本
姿勢として、その活動の成果を門外の
人に紹介したり、また逆に門外の文化
的活動の成果も積極的に吸収する謙虚
さが必要であろう。

大学祭が大学構成員の自由な発表と、
相互交流の場であると同時に、大学が
属している地域の人々との触れ合いの
場ともなり、憩いの場となると同時に、
明日からの大学生活の活力を生み出す
場ともなることは、すべての大学人が
心の奥深く抱いている大学祭の一つの
理想像ではあるまいか。

従来の広島大学大学祭に、このよう
な視点が全く欠けていたといっている
のではない。むしろ、これまでの主催
者たちの真面目な努力と、願いにもか
かわらず全構成員参加型の、大学祭の
実現が困難であったというべきなので
あろう。

このような背景をふまえつつ、また、
総合科学部の西条移転も念頭におきな

から学生委員会は、西条キャンパスで
の大学祭のあり方を検討してきた。そ
の結果、新キャンパスでの大学祭が、
より充実したものであるためには、そ
して、また、東広島市に位置する広島
大学が、新たな文化的な役割を果たす
ためには、大学祭への学部・教職員の
主体的参加と、地域住民への積極的開
放が必要であろうとの結論に達した。

大学祭に臨む学生委員会の基本的方
針は、七月の部局長連絡会議で了承さ
れ、各学部では、それを受けて具体的
な企画の準備をすすめてきた。さらに
「学園都市づくり交流会議」の場を通
じて、地域諸団体の参加呼びかけを行っ
ている。

大学祭をめぐるこのような経緯をき
わめて表面的に見れば、学生の自主的
サークル活動の一環として行われてき
た広島大学大学祭が、今後、「官制化」
するのではないかという懸念も生じよ
う。とりわけ大学祭に対して既成の
「伝統的」イメージを抱く学生諸君に
は、戸惑いさえ感じさせるかも知れな
い。しかし、そのような懸念や戸惑い
が誤解にもとづくものであることを、
あえて強調しておきたい。

広島大学大学祭が、広島大学構成員
の自主的で自由な創造と発表の場であ
るといふ大学祭の本質は、絶対的・恒
久的に維持されなければならないもの
である。さらに祭りとしての行事であ
るかぎり、その準備実行主体はあくま
で自主的な組織形態をとらねばならな
い。いずれの条件が欠けても、それは
大学祭の精神を否定する道を歩むこと

になるであろう。学生委員会の方針は、
これまでの広島大学大学祭の特質や精
神を生かし、それが西条という新しい
場で、更に充実して実現するよう側面
から支援しようというものである。と
はいえ、今年度は初の試みであるうえ
に、十分な時間的余裕もない。従って
主催者である大学祭実行委員会と、一
参加者となる各学部の間で、十分な話
し合いを行うことも困難である。

そこで本年度については不完全では
あるが、次のような態勢で臨まざるを
得ないと考えた次第である。即ち、主
催者は大学祭実行委員会という単独の
組織ではあるが、参加企画については、
学生サークル団体と各学部それぞれが
独自に準備することにし、大学祭実行
委員会と各学部、さらには各学部どう
しの間で調整が必要になる場合には、
学生委員会が、その責を負うことにす
る。従って準備過程では、学生サーク
ルと各学部が直接的に接触する機会は
ほとんどなく、それぞれが独立に参加
することになる。

もとより学生委員会として、これが
理想的な準備形態であると考えている
わけではないが、各参加者の努力によつ
て、結果として良かったと評価して頂
ける大学祭になることを期待してやま
ない。そして今年度のささやかな努力
が、来年度以降の大学祭にとって、一
つの礎石になれば幸いである。学生の
みならず教職員の方々にも、数多く参
加して頂ければと思う。

(うえだ・よしふみ)